

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 月 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820072

研究課題名（和文） 清末民国初期における湖南説唱本の研究

研究課題名（英文） Hunan 湖南 changben (song books) in the Late Qing and Early Republican Period

研究代表者

岩田 和子 ( IWATA KAZUKO )

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：90581819

研究成果の概要（和文）：

日本、北京、上海、湖南、広東、および台湾の図書館、研究機関に所蔵される湖南説唱本の各種版を閲覧、収集した。各種伝承媒体を経て民間に広がる故事と湖南説唱本の関係、説唱文芸全体からみた湖南説唱本の位置を新たに把握することができた。日本、中国における学会発表、論文発表を通して研究成果を報告した。

研究成果の概要（英文）：

Hunan changben (song books) were published in large numbers across almost all of Hunan province in the late Qing and early Republican period.

I undertake an exhaustive survey of various editions of Hunan changben of incognito inspections held both in Japan and abroad and analyze distinctive features of their content. I discover the reasons for the emergence of this peculiar cultural phenomenon and the background to the formation of the model of provincial culture to be seen in the circulation of changben with reference to contemporary social conditions and publishing activities, and I examine the position of these texts in literary history.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,050,000	315,000	1,365,000
2011年度	930,000	279,000	1,209,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,980,000	594,000	2,574,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：清末民初、説唱、湖南説唱本、通俗文芸、出版文化

## 1. 研究開始当初の背景

現在に至るまでの清末民国初期の説唱本に関する研究は、例えば、通俗文芸活動の東南海沿岸における流布、杭州、蘇州における弾詞、宝巻の出版、清蒙古車王府蔵曲本、清末に導入された石印本の技術による低コストでの書籍印刷の実現による上海における石印本印刷の隆盛と、それらが上海で出版された石印本が各地を席卷したこと（顧頡剛 1920）、その他、上海石印本鼓詞小説に関する研究（胡紅波 2000、2001、2003）や、最近ではそれらの母系と考えられる、清末に北方を中心に出版された木刻鼓詞小説に対する研究（李豫 2006、2007、2008、李雪梅 2010）などが挙げられる。また、『中国俗曲總目稿』（劉復、李家瑞 1932、1993）に代表されるような、中国各地に散在する各種説唱本に対して行われている目録整理作業がほとんどである（顧頡剛 1920、車錫倫 1994、大塚秀隆 1999、2000、仇江・張小瑩 2000、黃仕忠 2005、2006、2007、李秋菊 2007 など）。

これらの研究成果から、全国各地に散在する説唱文芸の様相が少なからず明らかになってきた。また、実際に資料を閲覧、収集し、研究を行う環境もかなり整い、上記のような江南や北方を中心とした代表的な説唱文芸以外の、今まで未着手であったその他の地域の説唱本についても考察することが出来るようになってきた。

申請者はこれまで、明代通俗小説、戯曲が、清代以降の各種説唱（弾詞、宝巻、鼓詞、木魚書、大鼓書、潮州歌、子弟書など）や地方戯などに吸収されるにあたり、如何なる地域、社会文化の影響を受けながら展開、流布したかについて研究を進めてきた。その過程で、早稲田大学中央図書館および演劇博物館に一定量所蔵される湖南説唱本を発見した。

湖南説唱本とは、清末民国初期に湖南省で大量に印刷、出版された説唱本のことを指す。湖南説唱本に特徴なのは、封面にどの地域のどこの書肆で印刷、出版されたのかが明記されていること、また清末民国初期に内陸部で異常に多く出版されたことである。

しかし、上述のとおり、これまで東南海沿岸部の説唱文芸活動については、盛んに研究が行われてきたが、時期をほぼ同じくして出版された内陸部の湖南説唱本については、ほとんど注意されてこなかった。たとえば、姚逸之・鍾貢勳述『湖南唱本提要』（中山大學民俗叢書九、1928年初版、1969年復刊）や、張繼光「一百五十種湖南唱本書録」（『中國文哲研究通訊』第8巻、第2期、1998年6月）など、数百種に及ぶそのテキストの存在と物語内容が紹介されるのみにとどまっている。

そこで、申請者はまず試みに、湖南説唱本にみえる各種物語のうち、明の戯曲から清雜劇、地方戯、説唱など各種伝承媒体を経て民間に広く流布した「秦雪梅」の物語を取り上げ、中国大陸、台湾、日本など全国各地に所蔵される上述した各種文芸（鼓詞、大鼓書、子弟書、馬頭調、木魚書、潮州歌、宝巻、高腔、花鼓戯など）にみえる関連版本の網羅的な収集、および書誌整理を行い、それらの流通と地域性について検討した。

その結果、東西、南北の演劇、芸能流通の交錯点となる湖南・湖北で清代から民国初期にかけて大量に出版された説唱本が、「秦雪梅」物語の演劇、芸能における全国的な流通に、重要な意義がある可能性が分かった。

これは、ひとつの文芸ジャンルに絞って行う従来の説唱文芸の研究方法与一線を画し、同じ内容の物語が、各種文芸ジャンルを介してどのように展開していったかを考察する、先駆的であり、今後進めていくべき重要な研究であると考えた。

以上が、湖南説唱本の流通と地域性について本格的に研究を進めるに至った背景である。

## 2. 研究の目的

目的は、湖南説唱本が、明清から民国時代に亘る中国伝統演劇、芸能の流通において、どのような役割を担うか、中国国内外の各地に所蔵される各種文芸ジャンルの版本収集と書誌整理の作業を通じて考察を試み、また併せて清末民国初期における説唱本の全国的な流通からみた湖南説唱本の位置、湖南の各地においてかくも説唱本が大量に印刷されたことに着目しながら、湖南の出版文化と、その地域文化的意義を解明することである。これらを研究の目的とした理由は、以下のとおりである。

まず、湖南省という地域は、東は広西、西は貴州、四川、南は広東、広西に連なり、明代には江西、安徽商人が頻繁に往来し会館が建ち、商業経済の発達によって経済活動だけでなく、文化活動の中継点としても繁栄し、元末明初、清末民初に旱魃や動乱などによって、江西、広東、福建からの大量の移民が湖南へ流入したり、湖南から四川へ人が移動したりと、人口の流動、即ち地域文化の流動も繰り返して行われて来た特殊な地域である。

また、太平天国の乱後は、湘軍が湖南にもたらした富により、豪華な宴会が開かれては芸能が所望され、近隣地域の芸人が湖南に集い、空前の繁栄を見せる。

そのような環境下で、湖南省各地に咸豊、同治年間あたりから、説唱本印刷所（湘潭の

黄三元堂、長沙同雙槐堂、楊大文堂等多数)が相次いで設けられ、大量の説唱本が出版販売された。

民国期になると湖南省全域のみならず、近隣地域へも販売網が拡大した。印刷された物語の内容は、「孟姜女」や「珍珠塔」、「祝英台」など伝統的なものがある一方で、清代の湖南出身の高官が他省へ訪れた時に起きた出来事や、湖南で起こった家庭内事件など、時事ネタと思しきご当地モノや、地域性、事件性の高い話題がまとまって出版される。

なぜこのような内容が創作され、出版され、販売されたのか。一体、湖南説唱本は湖南出版メディアにおいてどのような位置にあり、どのような意義を担っていたのか、物語の内容面からの研究を通して、その背景が解明されるのではないかと予想したからである。

また、現在に至るまで、湖南、湖北の演劇と芸能について、近現代の個別の劇種の研究はかなりされてきたが、その歴史的方面からの版本収集と書誌整理については、中国でもようやく進みつつある段階である。その地道な版本収集、整理作業を遂行しながら、清末民国初期における湖南説唱本の位置、湖南の出版文化に関する地域文化的意義を解明することによって、明清から民国期に至る伝統演劇、芸能の流通、説唱本流通の全体像をより具体的に把握することも可能となると予想したからである。

### 3. 研究の方法

現在、湖南説唱本の主要な所蔵場所は、北京の国家図書館、首都図書館、上海の上海図書館、復旦大学、長沙の湖南図書館、広州の中山大学図書館、早稲田大学中央図書館、演劇博物館等である。各地へ赴き、先ず、個々の物語に対する網羅的な版本収集と、綿密な書誌整理を積み重ねる。

この個々の物語にみられる事例の蓄積が、全国的な説唱本の流通において、湖南説唱本がどのような位置を占めるか、また物語の流布において、湖南説唱本はどのような役割を担っているのか、その類型を帰納する基礎となる。

湖南説唱本で採用された物語は、大きく古典小説や戯曲に取材する伝統的なものと、説唱として新たに創作されたものの二つに分類される。特に説唱本として創作されたものは、清代の湖南にまつわる時事らしき話題が多いという特色があるため、これらの物語を積極的に抽出して当時の社会的、地域的文化背景と併せて分析し、また演劇、芸能による上演記録と出版文化の方面から検証を進める。

### 4. 研究成果

清末から民国初期にかけて湖南省の各地で大量に出版された湖南説唱本の全体像を把握するため、日本は早稲田大学風陵文庫、演劇博物館、中国は上海、北京、湖南、広州に赴き、各図書館に収蔵される湖南説唱本の各種版本を網羅的に閲覧、収集した。

2010年度は、説唱文芸全体からみた湖南説唱本の位置を探るため、明の戯曲から清雜劇、地方戯、説唱など、各種伝承媒体を経て民間に広く流布した「秦雪梅」の物語を取り上げた(「秦雪梅」故事に関しては、前年度既に書誌整理研究の成果を発表済み)。各種芸能にみえる「秦雪梅」故事の内容を比較検討した結果、南戯伝奇という古い層で流布する内容と、説唱文芸という新たな層で流布する内容との、大きく二層をもって伝承すること、特に全国的に流通する「秦雪梅」故事の基盤となったのは、湖南説唱本『新刻秦雪梅三元記全部』であることが、より具体的に明らかになった。

この成果は2010年7月に山西師範大学戯曲文物研究所主催の東方文学与戯劇国際学術研討会で報告、2011年6月『黄霖先生七秩華誕師門同慶集』(鳳凰出版社)に「秦雪梅故事流伝考—以清末民初唱本为中心—」と題して論文発表した。

2011年度は、湖南説唱本の各種物語のうち、清代に湖広総督、両江総督、湘軍指揮官などの要職を務め、湖南を拠点に活躍した地元の英雄たちを主人公とする「私訪」故事作品群を取り上げた。これらは極めて限られた時間と地域で大量に出版され、流通した。この特殊な文化現象の起きた契機と、説唱本の流通における地方文化モデル成立の背景について、当時の社会事情や出版活動から考察し、その文学史的な位置づけを提示した。

この研究成果は、日本中国学会で報告し、10月には文化視野中的中国古代小説国際学術研討会(中国四川省内江市)で報告、10月『日本中国学会報』第63集にて「清末民初湖南における「私訪」故事説唱の流通」と題する論文を発表した。

この研究により、湖南説唱本が中国伝統演劇、芸能の流通においてどのような役割を担っていたか、また清末民初における全国的な説唱本の流通から見た湖南説唱本の位置を見出す糸口を得ることが出来たと考えられる。

また、物語の流布は、伝統演劇や説唱という実際の上演(非文字媒体)による伝達と、説唱本という出版物・読み物(文字媒体)としての伝達がとあり、この伝承形態は互いに循環し合いながら共存することも、本研究を通じて分かってきた。この構造の形成には、

清末民初における説唱本出版の隆盛が大きく影響していると言える。今後の研究において、この構造をより確実に再構築するため湖南説唱本だけでなく、他地域説唱文芸と比較検討しながら解明する必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

(1) 岩田和子「清末民初湖南における「私訪」故事説唱の流通」、『日本中国学会報』日本中国学会、第63集、pp. 234-249、2011年10月、査読有り

(2) 岩田和子「秦雪梅故事流伝考—以清末民初唱本为中心—」、『黄霖先生七秩華誕師門同慶集』鳳凰出版社、pp. 1137-1160、2011年6月、査読有り

〔学会発表〕(計2件)

(1) 岩田和子「關於清末民初在湖南流傳的私訪故事説唱」、文化視野中的中国古代小説国際学術研討会、2011年10月16日、四川：内江師範学院

(2) 岩田和子「清末民初湖南における「私訪」故事説唱の流通について」、日本中国学会第62回大会、2010年10月10日、日本：広島大学

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 和子(早稲田大学、文学学術院、助手)  
研究者番号：90581819